

## 途上国の勉強

小 倉 武 一

アジ研創設は、小生の農林事務次官の頃であった。この研究所に参与という制度があって、小生はその参与の一人であった。これがアジ研との出会いである。今日もその参与の制度は存続しているが、参与の資格・役割に若干の変化がみられる。関係省の現役の次官については、これをとりやめ、関係省のOBで途上国問題にかかわった経験のある次官級に委嘱することになったのである。

これは小生がアジ研所長になった頃の改訂である。アジ研設立の当初は事務次官たる参与その人の出席がみられたが、小生の所長の頃は、代理の部課長の出席となっていたのである。開催数も当初は毎月1回くらいだったと思うが、今日は年に1回、2回位になっている。

参与のほかに顧問という制度もできている。これはアジ研法令上のものではなく、アジ研の定款によるものである。小生もアジ研会長を1975年に辞してから、この顧問に委嘱されている。

参与や顧問のほかに、理事・所長・会長と10年ばかり、アジ研に在職している。アジ研の創立以来、形式上、役職に就いていなかったのは、1962～63年の頃だけのように思う。たまたま、その頃のことであるが、当時、アジ研所長であった東畑精一先生が、小生に「後進国の勉強をしたらどうか」と勧められた。後から気が付いたことだけれど、先生が急患から立直っておられた頃で、誰かの支えの必要を感じておられたのであろう。その頃、多分アジ研の理事の定員も一人増加したのであろう。多少の思案をしたけれど、当時、小生は創立当初の農業機械化研究所の理事長であって、これを辞することは困難なので、アジ研の方は非常勤理事として途上国の勉強をさせて貰うことにした。そして、農機研の理事長の任期3年を終えて、アジ研の常勤理事になったのである。研究所の規模（研究員の数）としては、農機研はアジ研より小規模であるが、理事長の俸給はアジ研の理事よりは高かったので、小生の俸給もアジ研に移って減俸となるのである。「それでも、農機研からアジ研に移るのは、余程農機研が嫌いになったのだらう！」という冗談まじりの批判が、農機研の送別会で、耳にはいつてきた。しかし、設立後、28年近い農機研には続いて愛着をもっているし、殆ど毎年、



春の櫻のころ、ここに招かれて研究成果を垣間見るのを楽しみにしている。

アジ研での楽しみは調査研究部（現在の地域研究部の前身）の毎週の研究（発表）会の傍聴であった。発表者は毎回交替である。研究会の参加は自由であるらしく、常連もあるが、自分の研究発表以外には出席しない傾向の人もあった。

この研究会は、当局側の指図などに基づくものではなく、地域研究部の自主的発起と運営によるものと理解している。アジ研会長を辞任してもう15年になるが、昔懐しいというよりも、この自主的研究会に魅せられて、都合がつく限り、出席したく思っている。

全く思い出になっているのは「アジ研は赤である」という批判である。いまのアジ研ビルに同居していたOTCA（海外技術協力事業団＝国際協力事業団の前身）の新しく組織された労組の、屋外への赤旗の羅列の刺戟も原因であったろう。これはアジ研の赤旗と見違えられた。アジ研の研究者、外部からの研究者にも赤がいるという指摘もあった。そしてその赤がリストアップもなされているとのことだった。こういう批判の鎮静に力をそそいだのが思い出になっている。色分けをして、一方が他方を処断するというのは、正義ではない。

小生が特にアジ研在職中に得たものは、海外、とくに途上国の産業・農業の現地視察の結果である。アジ研所長と同時に農林水産技術会議会長（非常勤）を兼ねていたので、アジ研での勉強によって、いま設立以来20年を迎える熱帯農業研究所の設立が結果したともいえる。思い返せば、東畑精一先生が「後進国のことを勉強したらどうか」と勧められたから、ともいえる。いまは熱帯農業研究所の「熱帯」を「海外」としたい。これが初心であった。

理事や所長の職を通じて知りあった青壮の研究者達の多くが、いま各種の大学教授として活躍されているのは、大いに喜ばしい。アジ研もその名称は英語ではアジアが脱けているが、それは会長が小林中氏のときであって、その意向に沿うためであった。研究内容も、それに相応しくありたいし、21世紀に向けて、研究のほかに教育があるのが望ましく開発研究所・開発大学（または大学院）が並立するのが望ましい。

（元会長）

## 日本の使命、アジ研の役割

岩 佐 凱 実

アジア経済研究所創立以来、既に30年を迎えたことは真にお目出度い限りです。その挙げてきた業績は余り派手に人目にはつかないが、その実績内容は素晴らしいものがあつたと自負して良いでしょう。アジア諸国は固より、アフリカ、中南米、アラブ諸国のその時々現在の現状の把握と将来の予測、問題点の指摘、莫大な資料が作られております。しかし、その研究的性格からか、世間一般からはその実績に値する評価を受けていないように感ぜられるのは、甚だ残念なことです。

夫々の現地の近代史、民族、民族性、社会構成、その政治経済の現状、将来性等々には、現地に駐在し、旅行し、或は書物を通しての研究、また各方面への日本の公共投資、或は全くの私的投資の研究報告には、我々の教えられ、示唆され、或は反省させられ、今后各方面の参考になるものが極めて多い。

ソ連を中心として東欧諸国の最近の政治情勢、経済状態は、御承知の如く我々の予想しなかつたスピードで激変しつつありますが、未だ落ち着いた安定した姿は必ずしも予測出来ません。しかし、太平洋を中心としたアジアも、新しい姿が胎動しつつあります。この太平洋の新しい姿を創り出す重要な役割の一部を担うことが我々の使命です。あくまでも、おごらず、誇らず、いい気にならず、着々と自己の力を培い、すべての点で諸国に協力し、助力し、又必要とあらば進んで指導してゆくことが我国に課せられた任務であり、運命でありましょう。そして、太平洋に存在する諸国・諸国民族の民生向上と発展と平和と安定に積極的に寄与し、ひいては世界平和に大きく貢献してゆくことが我々の使命でありましょう。



以上のようなことを考える時、アジア経済研究所の役割は重大であり、又その責任は一層大きくなってゆくことと思います。

この30年の成果を顧み、今後一層その研究の手段方法、且つその具体化について色々と新しい工夫をこらし、21世紀に向けて新しいアジア経済研究所の行方を打ち出されんことを衷心から切望して已みません。

(元会長)

## アジ研に期待する

鹿子木 昇

私は、アジ研創立20周年に当る年に、所長を退任した。在任8年間の思い出は、「アジア経済研究所20年の歩み」に載せてもらった通りである。その後、10年経ったが、その間、私は、どちらかといえば、アジ研と疎遠になり、最近のアジ研の実体を、詳知しているとは、いえない。先頃、顧問に就任し、顧問会議に出席する以外は、時々、送っていただく資料を読み、関心を持つ講演を聴きに行くことによって、僅かに、接触を保っているにすぎない。

定期刊行物として、『中東レビュー』（年刊）、『現代の中東』（年2回）、『ラテンアメリカ・レポート』（季刊）、『アフリカレポート』（年2回）が加わったことを知ったが、広報活動の充実には、なお一層の工夫と努力を重ねていただきたい。

諸外国からの客員研究員受入合計数は、265名にのぼり、元客員研究員の中からは、既に現地で、閣僚や学長クラスの方々も輩出しているとのことで、心強い思いである。

今年の夏期公開講座にも、時折り、出席して、講義を聴かせてもらった。あの国際会議場に、溢れるばかりの聴講者で、熱心に、ノートをとる姿の多いのが目についた。講義の終わったあとの質問も適切なものが多く、この講座も、ようやく、定着したものになって来たという感を深くした。

テーマとして、最近のソ連・東欧の変動の中東地域に対するインパクト、ソ連・東欧と中国の社会主義等が、とりあげられていた。

篠原前会長が、かねがね、その必要性を強調しておられた、intra-countryの研究を超えて、inter-country 的な研究が進められていることを知り、意を強くした。



後者のテーマは、今年4月の『アジ研ニュース』第111号の特集「変貌する社会主義圏」と題する、アジ研職員による座談会でも、中心的課題として、とりあげられ白熱した論戦が行われている。

ソ連・東欧・ベトナム・中国・北朝鮮と、専攻する対象地域を異にする研究者が、それぞれの地域に発生しつつある、或いは、これから発生するであろう政治的、経済的改革について、その改革を迫られる要因が、経済的危機に直面したという国内要因にあったのか、或いは、多大な軍事費負担に堪えきれなくなったという外発的要因にあったのかについての論争、各地域、特に、中国とソ連・東欧の改革の共通点と相違点の分析等が展開されていて、大変興味があった。

さて、あと10年で、21世紀を迎える。アジ研が、30周年記念事業の一つとして、今年暮に、「開発30年の成果と21世紀への展望」と題する国際シンポジウムを企画していることは、まことに時宜を得たものと、その成果に大きな期待を寄せている。

(元所長)

## 30周年に寄せて

森 崎 久 寿

私が鹿子木さんの後をうけてアジア経済研究所長に就任したのは、昭和55年（1980年）6月ですが、その直後の7月1日創立20周年記念式典を迎えました。我が国唯一の発展途上国に関する総合的調査研究機関であるアジ研の大きな節目にあたり、OB その他内外各界から忌憚のないご批判や反省の声を聞くことができたのは幸いでした。

その後、5年余にわたり第2次臨時行政調査会や臨時行政改革推進審議会における審議、答申の過程で、当研究所に対する関係委員の質問を通じて平素聞けないような様々の批判、要請あるいは激励を受けることになりました。

それにしても、私は研究所には四つの窓があるように思います。第1は、政府及び関係機関であります。第2は、学界及び学術研究機関であり、第3は産業界であり、そして第4は発展途上国をはじめ諸外国の研究者、研究機関に対するものであります。

アジ研を支えていただいている、それぞれ立場を異にする各界の要路の方々に、このことを理解していただくよう、たびたび足を運んだことも一つの思い出であります。

アジ研は本来地味な研究機関であります。それでもこの10年間にはかなり大きな変化があったように思われます。今までの幅広い研究蓄積の上に繰り広げられたいくつかの総合的調査研究事業があります。中南米・アフリカ・中東各地域の総合研究、特別合同研究、アジア工業化展望総合研究、日米を含むアジア国際産業連関表作成等の大型プロジェクトが進展しています。

特に国際的な共同研究が充実、発展してきたことを実感します。発展途上



国研究機関との共同研究、現地の専門家を交えた「ASEAN 等経済開発政策現地研究」、さらに最近では途上国経済発展研究所長会議や先進国研究機関との共同研究等が相次いで実施されています。また一昨年春、アジア太平洋開発センター（APDC）と共同で開催された国際シンポジウム「世界経済調整とアジア太平洋経済の将来」も画期的なものであったと思います。

冷戦後の新しい世界秩序の形成に、よりダイナミックな“世界に貢献するアジ研”として、さらに発展することを希求してやみません。

時折昼休みに散歩したアジ研界隈——坂があり、路地がいろいろ、古い街角が点在している“四谷のモンマルトル”を懐かしみながら……

（前所長）